26. 気になる世相幾つか（2）

1．ゴーン逃亡

昔、吉村昭の『長英逃亡』を読んだことがある。天保 10 年の蛮社の獄で永牢となり、牢屋敷の火災に乗じて脱獄、6 年余りにわたり幕吏の追求を逃れた当代随一の蘭学者高野長英の逃亡を、凄まじい勢いで描いた名作だった。

話は変わって昨年 12 月 29 日、前日産自動車会長カルロス・ゴーン被告のレバノン逃亡が明らかになった。劇的なことで、多くの人が予想だにしなかった事件であった。金融商品取引法違反の容疑で東京地検特捜部に逮捕されたのは凡そ 1 年前。当時、報道される「カネの権化」とも思われる強欲な蓄財術に、人間の欲望の奥深さを感じて驚いた。日産の内部抗争はゴーンの前にもあるが、その激しさにも驚いた。

ゴーン被告は音響機器の箱に隠れ、プライベートジェット機で関西空港から脱出したと見られている。複数の国籍の人物が関与し、米軍特殊部隊の経験者が助けたとも言われる。まるでサスペンス映画を見ているようだが、相当な準備があってのことだろう。

今年になってゴーン被告はレバノンで多くの記者が集まる中、会見を開き「日本では公正な裁判を受けられない」と逃亡を正当化した。この会見は実況中継され、私も見た。

長期の勾留により自白を強要する、いわゆる「人質司法」も批判している。この点だけみれば納得する人も多いような気がする。一旦被告にされると無罪を勝ち取るのは非常に難しいとよく言われていて、冤罪を生む原因とも言われる。日本の刑事司法の問題点をさらしたも形になった。

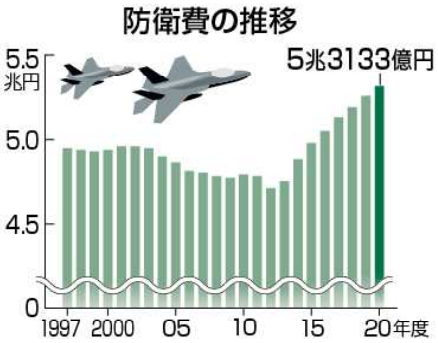
だからといって無論一国の制度を無視して逃亡したことが､正統化されることはあり得ない。世界の第一線で活躍する人物は「グローバルエリート」と言われるらしいが、そのグローバルエリートのゴーン被告の行動は身勝手としか言いようがない。同時にこの失態に、日本は誰がどう責任を取るのだろうか。

やや興味本位的になるが、保釈保証金 15 億円は没収され、噂では逃亡に 22 億円（16 億円というのもある）かかったという。この結果ゴーン被告の資産は 40 %目減りしたとか。それでも残金は桁外れにある。

国の行く末を憂えての行動が逆に弾圧を受けることになり逃亡する長英、一方で大規模なリストラを行って日産を建てなおしたが実はその裏で私利私欲に走っていた人間、天と地のほどの差がある。

2．防衛費

2020 年度の防衛予算案が 5.3 兆円となったことは、No.23 で述べた。宇宙・サイバー・電磁波といった新領域に新たな予算が付いたほか、最新鋭ステルス戦闘機 F35 などの米国製兵器の爆買いもあり、史上最高額を更新し続けている。以下、新聞やネット記事を参考に述べたい。



米国に有利な条件（価格や納期は米側の都合で決定、代金は前払い、米側の都合で契約解除可能）で兵器を購入する対外有償軍事援助（FMS）で 4,713 億円を計

上という。F35 や地上配備型迎撃システムのイージス・アショアなどである。この額にも驚くが、より驚くのは新領域の宇宙の軍事利用に関する予算である。

宇宙関連ではミサイル防衛（Missile Defense, MD）関連を除いて 506 億円を計上。「宇宙作戦隊（仮称）」が航空自衛隊に創設され、他国の衛星や宇宙ごみを監視する人工衛星の導入費も含まれ、MD 関連と合わせ宇宙関連は 1,000 億円以上になる、という。

サイバーとは「サイバネティックス（cybernetics）」ということらしい。「サイバネティックス」なら 50 年前(!)に職場で、ノーバート・ウィナーの『サイバネティックス』という訳本を数人で勉強会を開いて勉強したことがある。可成り重厚な内容だった。ウィナーはサイバネティックス提唱者として知られている。本の副題は「動物と機械における制御と通信」とある。いまサイバネティックスをネットで引くと「人工頭脳学」とある。「サイバースペース」「サイバーテロ」等と使われる。

少し余談となったが、防衛予算の「サイバー」は、「サイバースペース（電脳空間）」のことだろうか。この予算が 256 億円で、陸海空共同部隊のサイバー防衛隊を増員するほか、陸上自衛隊のシステム・ネットワークの防護体制構築のため、「サイバー防衛隊（仮称）」が新設される、とある。

電磁波関連では、敵のレーダーを妨害する「スタンド・オフ電子戦機」開発に 150 億円、電波で航空機のレーダーを無力化する「対空電子戦装置」の研究に 38 億円、とある。

「宇宙作戦隊」「サイバー防衛隊」「対空電子戦装置」という言葉が現実的になっていることに驚く。専守防衛とどいう関係があるのか、ないがしろにされていないか。JAXA（宇宙航空研究開発機構）にも何らかの影響が出てくるのだろうか。

人類は地球上の戦争だけでなく、宇宙をも利用する戦争を想定しはじめた。平和を願って人類の為に開発される技術を、人を傷つける武器に転用する人たちが必ずいるということか。そのことは歴史が証明している。

３．答弁

衆議院予算委員会の国会中継を見た。が、あまりにも首相等の不誠実な答弁に、途中で見るのを止めてしまった。後はニュースや記事で知る程度であった。

桜を見る会、IR（統合型リゾート施設）汚職、選挙とカネに絡んだ前経産相と前法相夫妻の問題などで野党の追及する場面は多かったが、ほとんどの答弁は内容のない空疎なものだった。空疎ならまだしも、はぐらかしや隠蔽、時にはうそまがいがまかり通り、それは確信犯的でさえあった。「書き換えたが改ざんではない」「廃棄したが隠蔽でない」「募ったが募集ではない」、その外「個人情報」「捜査への影響」はては「セキュリティ」を楯に答えない。

野党から何を聞かれても、論理は破綻しているのに、押し切ることだけを考えているのだったら罪深い。答弁側の政治家としての度量が問われ、信頼が全くない。こういった対応が一番政治不信に繋がっていると思うのだが。

一方この間に、あろうことか、新型コロナウイルスによる肺炎が大きな問題になってきて、野党もこれらの問題ばかり追求できない状況になって来ている。安倍首相にとっては逃げ道ができた感じだが、テレビで表情を見ていると以前より精彩さが欠けてきたように思える。何かを暗示しているのだろうか。

４．再び、はやぶさ２

No.18 の「１．はやぶさ２」で、「はやぶさ２は地球付近に戻ると、カプセルを地上に投下し、どこか知らないが別の天体の探査向かうというから、これも驚きである」と述べた。1 月 9 日の記事は「帰還後新ミッション　はやぶさ２　別の小惑星へ」を載せた。要約は次のようなもの。

昨年 11 月にりゅうぐうを出発した「はやぶさ２」は今年末頃地球に接近し、採取した砂を収めたカプセルを分離する。カプセルは地上で回収されるが、「はやぶさ２」は化学エンジンを噴射して離脱し航行を続けると。十分な燃料が残るので、りゅうぐうと同じく地球と火星間にある小惑星への着陸を含む接近観測が最善と判断。運用チームは地球から比較的近い小惑星など 354 天体を抽出して、地球や金星の重力を使った軌道変更（スイングバイ）を使えば最短で 6 年後に到達できる小惑星が複数あることがわかった。また。金星でのスイングバイを 2024 年に行い、29 年に到達できる小惑星も候補という。因みに、カプセルを地球に送り届けた後の残り燃料はイオンエンジン用が約半分、化学エンジン用が約 4 分の 1 と推定とある。一方で、「はやぶさ３」の具体的計画はなく、試料を持ち帰る探査も 2024 年打ち上げ予定の火星衛生探査計画（MMX）までないので、延長ミッションは貴重な機会だという。

壮大なロマンと崇高な計画に感激する。

５．上皇后の歌

人は何に感動するかわからない。

土井礼一郎さんという歌人が新聞（1 月 11 日付）の「短歌の小窓」というコーナーに書いた「作者を知り深まる魅力」と題した文章をたまたま読んだ。

そこでは昨年の歌会始で披講された美智子上皇后（当時・皇后）の歌

今しばし生きなむと思ふ寂光に園(その)の薔薇(さうび)のみな美しく

を紹介し、次のように解説していた。

「今しばし生きなむ」という後ろ向きともとれる初句に驚かされるが、だからこそこれからの日々がほのかな光に包まれるような希望を感じる。この歌に感動するのは第一線を退いたのちの人生をいかに生きるのかという現代人普遍の問題が含まれるからだが、その解釈も代替わり直前の皇后の歌と知るからこそ成り立つのである。

美智子上皇后の歌は以前にも、もう忘れてしまったがいい歌だなと思ったことがある。この記事が契機となり、新聞に載る短歌と俳句のページを切り抜いて集めるようになった。掘りゴタツでそれを取り出して読むのも楽しみだ。好きな古典の和歌集なども再度読みたいと思う。

（2020 年 2 月 3 日）